

研究課題：歯の保存に対する Supportive periodontal therapy の効果

研究者名：北村正博、野崎剛徳、山田 聡、村上伸也

所 属：大阪大学大学院歯学研究科 口腔分子免疫制御学講座
歯周病分子病態学（口腔治療学教室）

（緒言）

歯周炎は非常に再発リスクの高い疾患であることから、メンテナンスに移行した多くの歯周炎患者では、その進行阻止や再発予防を積極的に支援する supportive periodontal therapy (SPT) が不可欠である。しかしながら、実際に SPT が歯周炎患者に効果的であることを客観的に示す研究は少ない。そこで、本研究では、長期 SPT を受けている歯周炎患者を対象として SPT の歯の保存に対する効果を検討した。

（材料と方法）

大阪大学歯学部附属病院口腔治療・歯周科で歯周基本治療や歯周外科処置を行い SPT（約 3 か月毎のリコール間隔で、口腔衛生指導、機械的歯面清掃、ポケット内洗浄、スケーリング・ルートプレーニングなどを必要に応じて行う）に移行した 3896 人の歯周炎患者を被験者とし、診療録などから、被験者の性別、年齢、残存歯数の経時的推移に加え、その経年的な治療継続率を調査した。そして、被験者から 10 年以上 SPT を行っていた患者（268 人）を抽出し、初診時、歯周基本治療終了時、SPT 開始時に加え、SPT 期間は 1 年ごとに残存歯数を調べ、その経時的な推移を平成 17 年歯科疾患実態調査の結果と比較することにより、歯の保存に対する SPT の効果について検討した。

（結果）

1. 初診から 10 年および 20 年経過時の治療継続率は、それぞれ 34.1% および 12.3% で、SPT 期間の長い患者ほど治療継続率が低下する傾向が認められた。
2. 10 年以上の長期 SPT 患者は SPT 開始時に平均 24.4 本の歯を保有し、SPT 期間に年間 0.22 本の歯を喪失したが、その喪失歯は平成 17 年歯科疾患実態調査で示された同年齢層の経年的な喪失歯の増加よりも少なかった。
3. 10 年以上の長期 SPT 患者において、55 歳以上の年齢層では平成 17 年歯科疾患実態調査と比べて 20 歯以上の保有者の割合が高かった。
4. SPT 開始時の残存歯数が平成 17 年歯科疾患実態調査で示された同年齢層の残存歯数より少なかった人でも、長期 SPT 後には同調査における同年齢層の人よりも多数の歯を保有していた。

（考察および結論）

本研究より、10 年以上の長期 SPT 患者は平成 17 年歯科疾患実態調査で示された同年齢層の人よりも経年的な喪失歯の増加が少なく、高年齢でも多数の歯を保有していることが示され、SPT が歯の保存に効果的であることが明らかとなった。